

Ⅱ-8 [コラム] 湯舟坂2号墳出土 貝装馬具の素材

黒住 耐二

1. はじめに

6世紀後半の円墳である湯舟坂2号墳からは、当時の貴重な副葬品が多数出土しており、国の重要文化財にも指定されている。様々な副葬品の中でも馬に付けた金具（馬具）には、南海産巻貝のイモガイを用いたものがあり、イモガイ装馬具や貝装飾金具などと呼ばれている。

湯舟坂2号墳のイモガイ装馬具については、発掘報告書において花谷浩（1983）によって詳細な報告がなされている。朝鮮半島と日本の出土事例が集成され、形と用法・呼称に関して考察がなされ、その後の研究の基本となっている。イモガイ装馬具研究はその後、宮代栄一（1989）や木下尚子（1994）らによって進められていくこととなるが、湯舟坂2号墳の馬具やその報告が、研究史に占める重要性は今なお色褪せていない。これらの研究の積み重ねによって、イモガイ装馬具には沖縄で採集されたアンボンクロザメとクロフモドキという“南海産大型イモガイ”が限定的に用いられたこと、関東地方と北部九州を中心に出土し、畿内で製作されたとみられることなどが明らかとなっている。

2. 湯舟坂2号墳出土貝装馬具に見られるイモガイの痕跡

湯舟坂2号墳の貝装馬具は、鉾や座金具といった金属部分こそ良好に遺存していたものの、貝殻のほとんどは溶けてしまい、鉾脚に黄褐色の膜状の有機質が付着している程度であった。膜状の有機質には同心円状構造が良好に確認できる個体もあった（写真1）。このような同心円状構造からみて皮革とは考えにくく、膜状の質感から木材とみることも難しい。これまでの研究も参考にすると、イモガイとみてまず間違いないものと判断した。

イモガイとみられる膜状の有機質は、湯舟坂2号墳から出土した多くの「貝装馬具」に認め

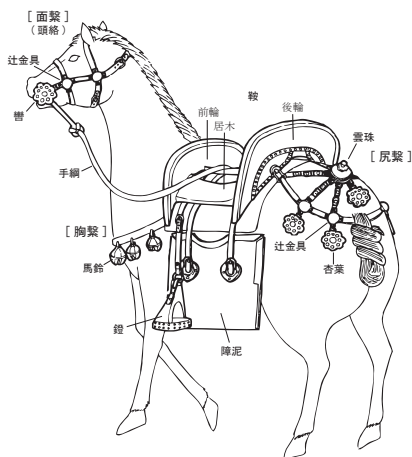


図1 馬具の部分名称（諫早直人氏作成）



写真1 イモガイ製馬具にみえる
同心円状構造（栗山雅夫氏撮影）



写真2 アンボンクロザメ(左)とクロフモドキ(右)



写真3 アンボンクロザメの殻頂部

(写真3)、④側面が直線的であること、⑤殻の黒い点は表面にだけ存在し、少し削ると真っ白な陶白色となることなどが挙げられよう。螺塔を輪切りにして、形を整え、その後、表面を磨き、陶白色の製品に加工した訳である。

慶州皇南大塚南墳をはじめ、5世紀後半から6世紀初頭の新羅の王族クラスの墓から、イモガイ装飾金具が出土している(木下2002)。金冠塚ではガラス装飾金具と一緒に出土しており、陶白色のイモガイが青緑や紺色のガラスと対比して用いられた可能性も指摘されている(木下1994)。ただし、新羅のイモガイ装飾金具は直径が3cmと小型であり、螺塔が緩やかに膨らんでおり、南海産大型イモガイとは異なる種が用いられていたとみられる。

既往の研究では、日本から出土するイモガイ装馬具は基本的に畿内で製作され、関東や北部九州などの各地の有力者に付与されたと結論付けられてきた。湯舟坂2号墳出土イモガイ装馬具は、数少ない畿内周辺地域からの出土事例であり、注目される。

4. 沖縄における南海産大型イモガイの集積―“交易用の保管(ストック)”

ヤマト(≒本土)の弥生時代から平安時代は、沖縄では貝塚時代後期にあたる。この時代の特徴として、海浜部(“砂丘”)に立地する遺跡からは、しばしばゴホウラやイモガイのようなサンゴ礁性大型巻貝が集積された状態でみつかることがあり(図2)、現在までに100例以上が知られている。これらの貝(殻)集積は、ヤマトの有力者が好んだ貝輪などの素材として、“交易用に保管していたもの”と考えられている(写真4)。イモガイ集積は、南海産大型イモガイの2種の

られた。花谷の報告によれば比較的貝が良く残っており、中には8mmの厚さをもつものもあるとのことだったが、今回観察したところ、貝の痕跡はそれ程明瞭ではなかった。貝を取り付けた金具から貝の厚みは5mm程度、座金具の直径からみて、直径3cm以上の南海産大型イモガイであったと推測される。

3. 南海産大型イモガイの利用と加工

イモガイの仲間には、日本だけでも数十種にのぼる多数の種がある。これまでの知見による限り、日本のイモガイ装馬具には、それらの中でも南海産大型イモガイのアンボンクロザメとクロフモドキだけが用いられているようである(写真2)。

この選択的に用いられた2種のイモガイの特徴として、①殻が大きく、直径が5cm以上にまで生長し、馬具の形状に適していること、②殻が厚く、破損しにくいと考えられること、③螺塔が平たく、馬具の形状に適していること

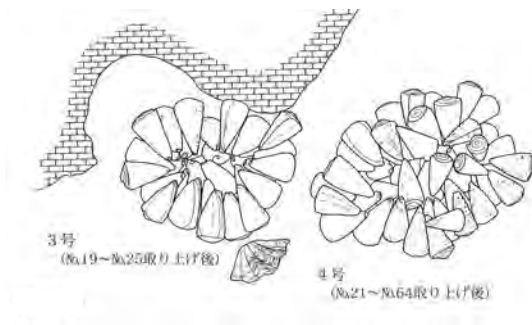


図2 沖縄のイモガイ集積（盛本 2005）



写真4 ゴホウラ（左）など交易品の貝類

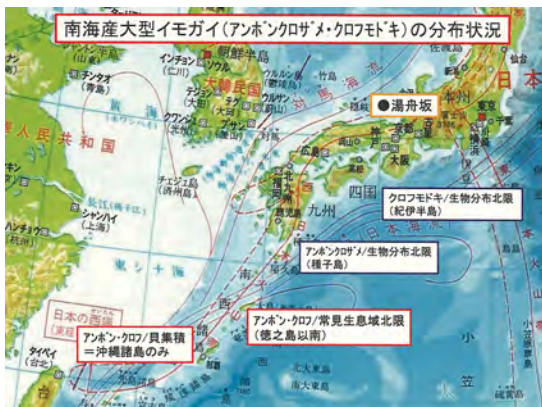


図3 南海産大型イモガイの分布



写真5 イノーの発達する島（沖縄県粟国島）

みでほぼ構成されることもわかっている。イモガイ集積についてはこれまで、弥生時代の貝輪と湯舟坂2号墳のような古墳時代のイモガイ装馬具という2時期の利用が想定されてきた。ただし、ほとんど土器などの遺物が伴わないなど、貝集積の年代決定には多くの困難があり、馬具に利用されたイモガイ集積を特定することは容易でない。

この問題を解決するために、最近、木下尚子によってイモガイ自体の年代を直接測定する研究が進められた結果、少数ではあるものの6世紀の事例が確認され、古墳時代の馬具に用いられたイモガイ集積の存在がついに証明された（木下 2021）。

なおこれらの貝集積は、琉球列島（≡南西諸島）の中でも奄美諸島からはまだみつかっておらず、沖縄諸島でのみ確認されている（さらに南方に位置する八重山諸島は、当時、別の文化圏であることがわかっている）。もちろん今後、奄美諸島からも発見される可能性はあるが、貝集積はサンゴ礁性大型巻貝の生息数の多い、沖縄諸島の特徴の可能性もある。

5. 南海産大型イモガイの生息環境と採集

イモガイの中には毒針を打ち込んで餌を麻痺させる種もあり、人が誤って刺されると死亡するほどの猛毒をもつ種（アンボイナ）も知られる。確実に人の死亡が確認されているのはこれまでのところアンボイナくらいであり、アンボンクロザメなどは採集時にも安全な種といえる。

南海産大型イモガイは、サンゴ礁の白波の立つリーフ（礁嶺）の岸側で、水深数 m 程度のイノー（礁池）の海底（砂質）に生息している（写真5）。また、生息数はアンボンクロザメの方がクロフモドキよりも多いものの、いずれも一昔前までは比較的普通に採集することができ

た。このように、南海産大型イモガイは潜水の必要ない浅い海に生息しており、サンゴ礁を歩き回れば容易に発見することができ、その採集にはさほど危険が伴わない。

6. 南海産大型イモガイ以外のイモガイ利用の可能性

イモガイ装飾金具がいつ、どこで最初につくられたのかについては、新資料の増加によって議論の余地がでてきているが、いずれにせよ日本列島ではなく朝鮮半島東南部が有力な候補地となっている。湯舟坂2号墳からは日本海を挟んで朝鮮半島東南部と比較的近い位置にあり、“南海産ではない、ヤマトのイモガイが使用された可能性”を想定することもできそう。ただし丹後の海岸には、中型の種を含めてイモガイは分布しておらず、この土地の貝を使った可能性はまず否定できる(図3)。また、朝鮮半島東南部のイモガイ装飾金具は大型イモガイとは思えず、断面図をみると長崎県の対馬でも採れるベッコウイモによく似ている。ただしこの種の殻はかなり薄く、製品としては利用できそうにない。鹿児島湾に多いイモガイの一種であるロウソクガイの殻は厚く、螺塔も高いので、この種が用いられたのかもしれない。今後、まだ確認されていないイモガイ種の馬具への利用がみつかる可能性がありそう。

7. おわりに

今回、湯舟坂2号墳の貝装馬具に、沖縄から運ばれてきたアンボンクロザメなどの南海産大型イモガイが利用されていたことを紹介させて頂いた。新たな視点という訳ではないが、古墳時代(貝塚時代後期)の丹後と沖縄の間に間接的とはいえ、つながりがあったことを知って頂ければ嬉しい限りである。

ところで、久美浜町の隣の網野町(いずれも京丹後市)には京都府唯一の縄文貝塚である浜詰遺跡があり、最近も調査が進められている。湯舟坂2号墳出土貝装馬具は日本海産の貝ではなく遠く離れた南海産の貝であり、馬具もまた畿内などで製作された可能性が高いが、湯舟坂2号墳周辺の古墳時代人の海や貝とのかかわりが、日本海側では珍しい貝装馬具副葬にあらわれているのかもしれない。浜詰貝塚や湯舟坂2号墳から出土したイモガイ装馬具をきっかけに、京丹後市の豊かな海や遺跡、人と貝の関係にもっと目を向けてもらえることを願っている。

参考文献

- 木下尚子 1994「イモガイをつけた馬具—騎馬文化の中の南海産貝」『第11回古代史シンポジウム—倭国の形成と東アジアの騎馬文化』全日空・朝日新聞社
- 木下尚子 2002「韓半島の琉球列島産貝製品—1～7世紀を対象に—」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店
- 木下尚子 2021「貝殻集積からみた先史時代の貝交易(2) 2019年度の炭素14年代測定結果をもとに」『国立歴史民俗博物館研究報告』第229集 国立歴史民俗博物館
- 黒住耐二・大作晃一 2021『くらべてわかる貝殻』山と溪谷社
- 白井祥平 1997『貝Ⅱ』(ものと人間の文化史 83-II) 法政大学出版局
- 花谷浩 1983「馬具」『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会
- 宮代栄一 1989「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』第76号 駿台史学会
- 盛本勲(編) 2005『瀬底島・アンチの上貝塚発掘調査報告書』沖縄県本部町教育委員会

編集後記

2020年に始まる「湯舟坂プロジェクト」は早くも6年目に突入している。教員生活のほとんどを久美浜に捧げてきたといえば大げさだが、府大に着任したのが2018年なので、私だけでなくたくさんの教え子がそれまで縁もゆかりもなかった久美浜に足繁く通ったことは確かである。3回分の成果報告会資料集をまとめて一書にしようと、気軽な気持ちで本書の制作を思い至ったが、皆さんお忙しく、思いのほか難産だった。スケジュールに追われる中、献身的に編集作業を手伝ってくれた二人の大学院生には感謝してもしきれない。

なお、湯舟坂プロジェクト立ち上げ時から一緒に仕事をしてきた、菱田哲郎先生が今年度でご退職される。まだ隣の研究室には山積みの荷物があるので実感がわからないが、1994年に開設した府大考古にとって最大の岐路であり、寂しい限りである。様々な仕事を通じて文化遺産の地域資源化の重要性を教えていただいた学恩に感謝するとともに、兵庫県と接する久美浜にこれからも足繁くお越しいただければと思う。(い)

表紙写真

- 上左 双龍環頭大刀調査風景（諫早直人撮影）
上中 第2回 ACTR 成果報告会風景（栗山雅夫撮影）
上右 「つなプロ」風景（諫早直人撮影）
下 湯舟坂2号墳出土双龍環頭大刀（栗山雅夫撮影）
裏表紙写真 湯舟坂2号墳全景（南西から。栗山雅夫撮影）



京都府立大学文化遺産叢書 第33集

地域資源としての湯舟坂2号墳

編集 諫早 直人（京都府立大学文学部准教授）
発行 京都府立大学文学部歴史学科
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5
<https://kpu-his.jp/>
発行日 2025年3月6日
印刷 北斗プリント
〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2